

# 自己の子ども期の体験と「子ども」についての理解の関連

岡野雅子 生活科学教育講座

キーワード, 子ども理解, 子ども期の体験, 養護性, エピソード, 自己分析

## 1. 目的

次世代を担う子どもを健全に育成することは、市民としての責務の一つであるといえる。この、次世代を健全に育成するための資質は、「親性」「育児性」「次世代育成性」などさまざまに呼ばれてきたが、近年ではより包括的に「養護性」として捉えられるようになってきた。そしてそれは、生涯発達において青年期に獲得すべき重要な発達課題の一つである。

臨時教育審議会は昭和61年4月に『教育改革に関する第二次答申』を表し、「家庭・学校・地域の三者が一体となって子どもを育てる視点に立ち、家庭が自らの役割や責任を自覚するとともに、家庭基盤の整備の推進などにより、家庭の教育力の回復を図る必要がある。」と指摘した。そのための方略として4項目を挙げ、その第1番目に「親となるための学習を充実する。この観点から家庭科等を見直す。」と明記している<sup>1)</sup>。

ところで、わが国の合計特殊出生率は1.29（平成15年）となり、人口の現状維持に必要なレベルの2.08を大きく下回り、史上最低値を更新中である<sup>2)</sup>。中央教育審議会報告『少子化と教育について』では、少子化の要因として、未婚化・晩婚化の進行、夫婦の子どもの数の変化、地域社会における子ども数の減少を挙げ、「ある面では子どもや親子連れに対する寛容さがなくなり、社会全体で子どもを受け入れるふところの深さがなくなったという見方もできるのではないかと考えられる。」と述べている<sup>3)</sup>。

また、家族や家庭生活の変化とともに、親（主に母親）は育児に対して喜びよりも孤独感や焦燥感・疲労感を感じて、いわゆる育児不安に陥る場合も少なくないことが報告されている<sup>4)</sup>。

さらに他方では、児童虐待に関する相談件数が近年急増しており、平成15年には26,573件に登り（平成8年は4,102件）<sup>5)</sup>、もはや社会問題の一つといっても過言ではない状況を呈している。

このような現状において、子どもの健全な発達を阻害する要因について解明し問題の解決へ向けて検討するなかで、改めて「親性」あるいは「養護性」を獲得する課題の重要性が一層認識されるようになってきている。前述の中央教育審議会報告『少子化と教育について』の中でも今後一層取り組むことが提言されており、学校教育においては「子育ての大切さ、親の役割、更には地域の一員としての近隣の子どもとのかかわり方等について考えさせる『子育て理解教育』という視点を持って、これらの学習を教育課程全体の中で適切に位置づけ、教育活動の展開を図ることが求められる。」と指摘している<sup>6)</sup>。

ところで、子どもに対して良好なイメージを持つことは「親性」あるいは「養護性」の獲得にとって重要であると考えられることから、筆者は青年期女子の子どもに対するイメージについて探った。その結果、全体的には子どもに対して良好なイメージを持つ者が多いが、しかし1/4は悪いイメージを持っていた。そして、子どもイメージの悪い群では、彼女たちを取り巻く人間関係が量的にも質的にも乏しいことが明らかとなった。したがって、身近かな家族員や友だちとの間に共感的であると同時に指導性を伴う人間関係の構築が良好な子どもイメージの形成と関連が深いことが示唆された<sup>7)</sup>。さらに、青年期女子（女子学生）の子どもイメージと既に親となり子どもを育てている幼稚園児の母

親の子どもイメージとを比較したところ、女子学生群は子どもを「かわいい」あるいは「うるさい」として、その一面のみを捉える傾向があることがうかがえた。一方、幼稚園児母親群では、子どもをさまざまな側面から捉えていて、プラス・イメージの回答も多いもののマイナス・イメージの回答も多かった。したがって、子どもに対してプラス・イメージを持つことは重要であるが、それは子どもの一側面のみに基づいた偏ったものではなく、子どもの発達を理解したうえで子どもを全体として捉える視点が重要であり、そのような複眼的な子ども理解がこれからの保育教育に望まれることの示唆を得た<sup>8)</sup>。

これらの先行研究を踏まえて、本研究においては「子ども」についての理解の方法についての検討を試みたい。

人は誰でも、子ども期をとおとなになる。子どもに対する理解は、その交流体験が有効に作用することは先行研究が指摘するところであるが<sup>9) 10)</sup>、子ども期はすべての青年が発達段階として通ってきた時期であるので、自分の子ども期を対象化して、その個人的体験について分析的に改めて考えてみるのが可能である。このことは、高齢者を理解する課題を考える場合とは異なる点であるといえる。すなわち、(1)自分自身が子どもだったときに、自分が感じたことを思い起こし、(2)現在の自己はそれをどのように感じるかを改めて考えてみるができる。そのプロセスは、子どもの存在について、あるいは子どもが生きている世界について、洞察し、理解を促す一つの方法となると考えられる。

このような問題意識のもとに本研究に取り組み、子どもに対する理解を深めるための一方法として、自分の子ども期を参照することの有効性について検討し、既に報告した<sup>11)</sup>。前報では、自己の子ども期について回想することを通して「子ども」という存在を理解する、という図式であった。そして、思い起こすことを導く質問として、(1)どのような子どもであったか、(2)子ども期をいまはどのように感じているか、そしてよりいきいきと回想する方法として(3)嬉しかったエピソードについて尋ねた。さらに、子どもについての理解は、(a)子どもとはどういう存在であるか、(b)子どもが嬉しいと感じる状況とはどのような状況であるか、(c)今後おとなとして親として子どもとかかわる時に、子どもと良い関係を形成するにはどのようにしたら良いか、等について尋ねた。

また、「子どもに興味がある」「子どもと遊ぶのが好きだ」「赤ちゃんを見ているだけで楽しい」などの子どもに対する感情についての質問項目も設定した。なお、子どもに対する感情については、子ども期の回想を行う2か月前にも事前調査として実施した。

その結果、子どもに対する感情は、自分の子ども期を回想した後は、若干好転することが認められ、子どもに対して「子どもに興味がある」「子どもはかわいい」などのプラス項目の回答はほとんど変化が認められないが、「子どもの相手をするのは煩わしい」「子どもは嫌いだ」などのマイナス項目を肯定する割合は、子ども期を回想した後は減少し、その差は一部の項目では統計的有意差が認められた。したがって、子ども理解の一方法として自己の子ども期を回想することは有効であるという先に設定した仮説は、一応支持されたといえる。

しかし、さらに結果を詳細に検討してみると、若干の問題が残された。それは、子ども時代を具体的にいきいきと思い起こす方法として「嬉しかったエピソード」について尋ねたが、その回答には「家族で旅行した」「欲しいものを買ってもらった」などを挙げる者が多く、また、子どもに対する理解の項目である「子どもが嬉しいと感じる状況とは」の間には、「ほめられること」「認められること」の回答が多く提出された。したがって、自己の子ども期の体験についての事実を述べる回答と、子どもという存在についての認知的な側面との間は、直接的には結びつかず、若干の隔りがあるように

思われた。

このような前報の結果を踏まえて本報では、子ども期の体験の「嬉しかったこと」と「子どもが嬉しいと感じる状況」の間の不連続について解明することを試みたい。

そこで、改めて、資料収集を行い、自己の個人的でリアリティのある体験を想起することにより、それを材料としてその時の自分の心情について分析的に考えてみるという手続きを踏むことにより、その両者の関連について明らかにすることにした。本報告の研究の枠組みは図1のようである。

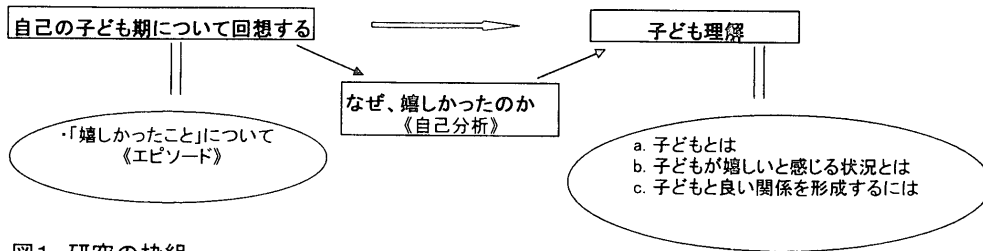


図1 研究の枠組

## 2. 方法

方法は質問紙調査法である。

調査対象者は、2年制大学3校に在籍している女子学生162名である。なお、養護性の獲得の課題は青年期女子に固有の課題というわけではなく青年期男子にも重要であるが、今回は前報の対象者と同様に青年期女子のみを調査対象者とした。

質問項目は、(1)自己の子ども期に嬉しいと感じたエピソード、(2)その時になぜ嬉しいと感じたのか(自己分析)、(3)「子ども」についての理解、である。

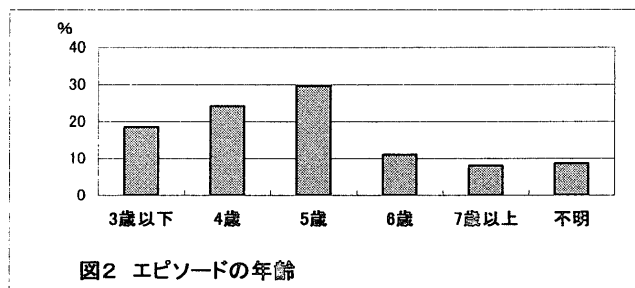
資料収集時期は平成11年12月である。

## 3. 結果と考察

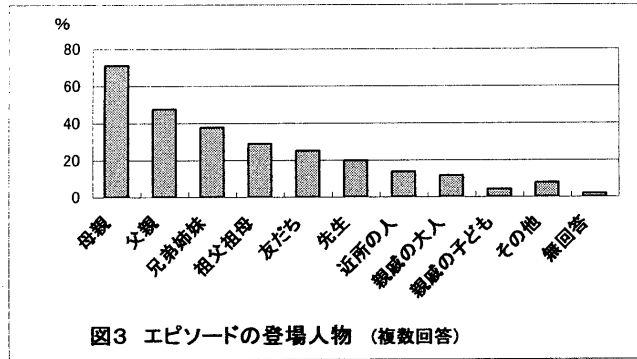
(1) 自己の体験(子どもの頃の嬉しかったエピソード)について

### 1. エピソードの年齢、登場人物、場面

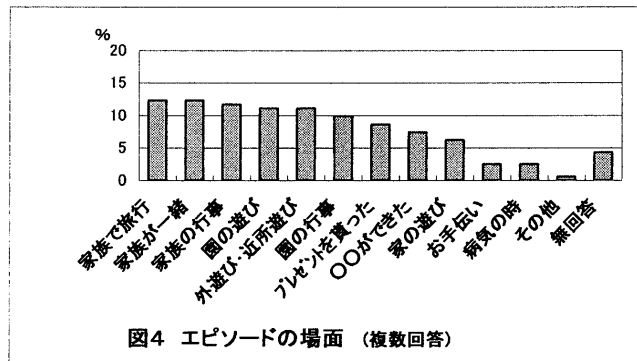
嬉しいと感じた場面を思い出し、その年齢を尋ねたところ、図2の通りである。5歳時が最多で、4歳時、3歳以下と続いている。



その嬉しい場面に登場する人物は、母親、父親、兄弟姉妹、祖父祖母、友だち、先生などであり、母親を挙げる者は72%にのぼる(図3)。したがって、子ども時代の嬉しい思い出にかかわっている人は家族が多いことが分かる。



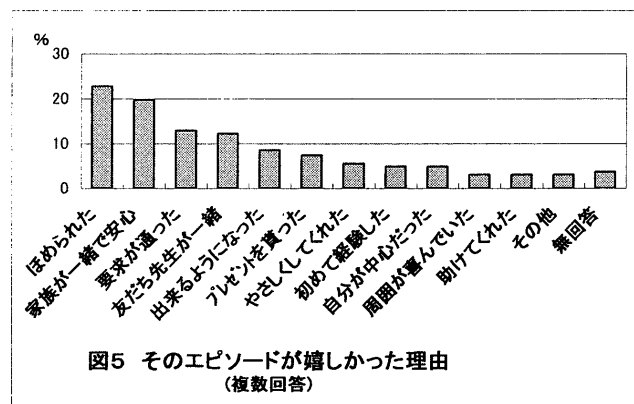
嬉しいエピソードの場面については、「家族旅行や家族で外出したこと」「家族が一緒のときや母親と一緒にいるとき」「家族で誕生日やクリスマス、お正月などの行事」などの回答が多く、「幼稚園・保育所で遊んでいる場面」や「外遊びや近所遊び」「幼稚園・保育所の行事」と続く。さらに「プレゼントをもらった時や欲しい物を買ってもらった時」「何かが出来るようになったとき」「家で遊んでいるとき」「お手伝いをしているとき」「病気の時」となっている (図4)。



したがって、嬉しい思い出のエピソードは、家族と一緒に旅行する、家族が一緒にいる、家庭での行事などが多く、家庭生活の中の日常とは少しだけ違う状況、少しだけ非日常的な状況が比較的良好な記憶として留まり、思い出されやすいようである。

## 2. なぜ嬉しかったのか (自己分析)

その場面は「なぜ嬉しいと感じたのでしょうか?」と問うことにより、自己分析を促した。回答は自由記述であるが、それを分類・整理すると図5のようである。

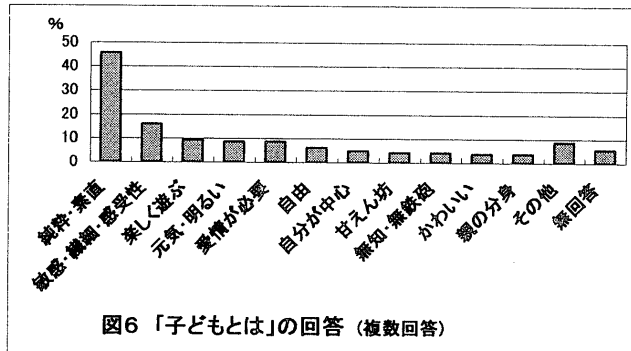


「ほめられたから」「家族が一緒だったので安心だったから」「自分の要求が通ったから」「友だち

や先生と一緒に楽しかったから」「出来るようになったから（例：自転車に乗れるようになった）」「プレゼントをもらったから」「優しくしてくれたから」「初めての体験だったから（例：初めて見た）」「自分が中心の行事だったから（例：誕生日会）」「周囲の人が喜んでくれたから」「困っている私を助けてくれたから」などが理由として挙げられた。

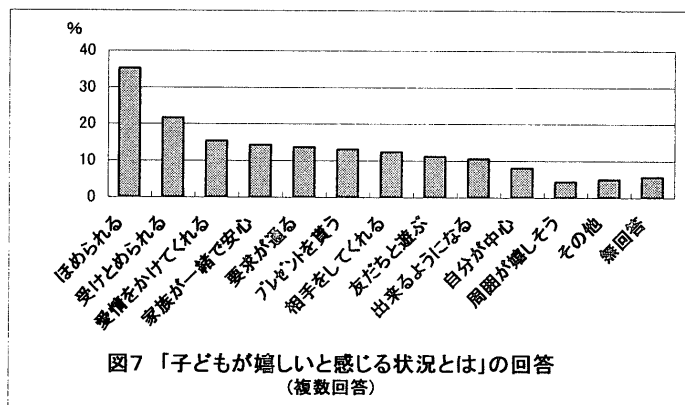
## (2) 子どもとは

「子ども」についての理解の項目を見ると（図6）、約半数が子どもは「純粹あるいは素直」と回答している。次いで「感受性が強く敏感で繊細」「楽しく遊ぶもの」「元気で明るい」「子どもには愛情が必要である」「子どもは自由である」「子どもは自分中心でわがままである」などの順となっている。



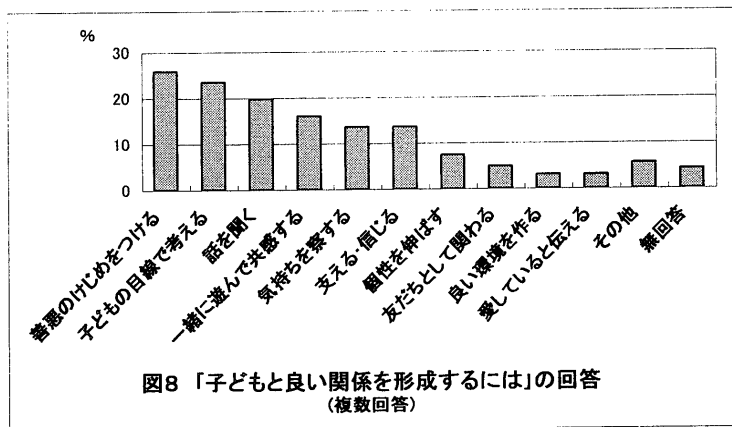
## (3) 子どもが嬉しいと感じる状況とは

子どもが嬉しいと感じる状況については、「子どもは、ほめられると嬉しい」「受けとめてくれると嬉しい」「愛情をかけてくれると嬉しい」「家族や安心できる人と一緒にいると嬉しい」「自分の要求が通ると嬉しい」「プレゼントをもらおうと嬉しい」「おとなが相手をしてってくれると嬉しい」の順となっていて、さまざまな答が提出された（図7）。



## (4) 子どもと良い関係を形成するには

自分がおとなの側に立つときに、「子ども」とどのようにしたら良い関係を築くことが出来るだろうかについて尋ねたところ、結果は図8の通りである。「善悪のけじめをしつける」が26%と最多で、「子どもの目線で考える」「子どもの話を聞く・子どもとコミュニケーションを図る」「子どもと一緒に遊んで子どもの心に共感する」「子どもの気持ちを察する」「子どもを支える・信じる」などの意見が1割以上の者から提出された。



(5) 体験の自己分析結果と「子ども」とはの関係

次に、上記の子ども期の体験について自分はなぜあの時に嬉しいと感じたのかについての自己分析 (図5) と、「子ども」とはの回答 (図6) をクロスして検討してみよう。

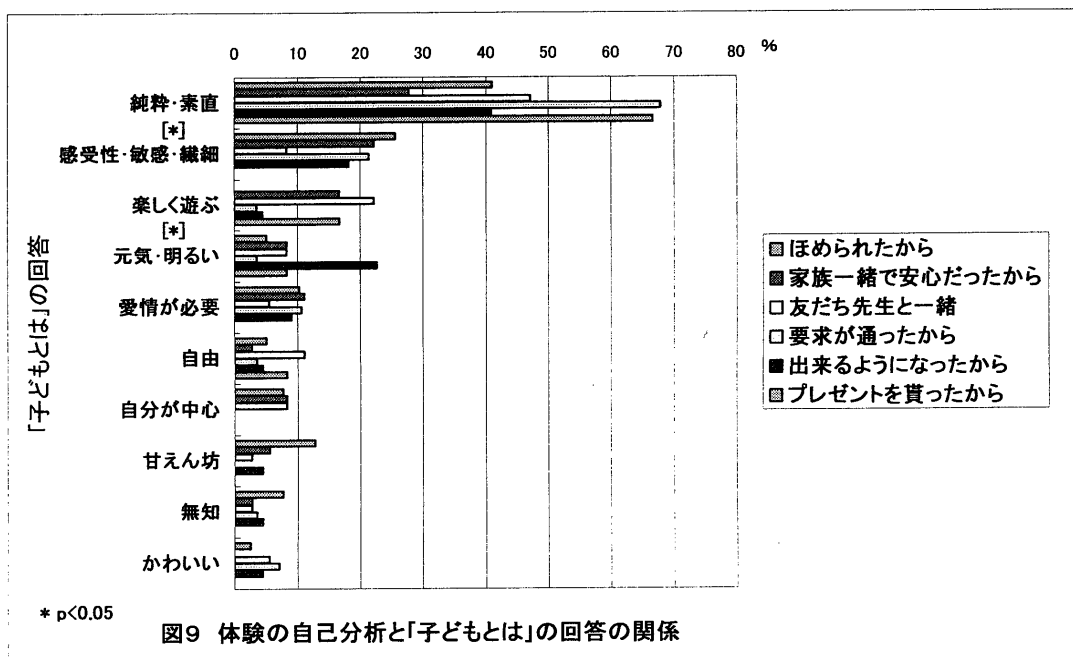


図9をみると、自己分析結果がどのようなであっても「子どもというものは、純粋で素直」とする回答が最も多いことがわかる。中でも「自分の要求が通ったから嬉しかった」とするものと「プレゼントをもらったから嬉しかった」とする者は、ひときわ「子どもとは純粋である、素直である」の回答に集中している。

「ほめられたから嬉しかった」と自己分析した者は、「純粋、素直」とともに子どもは「感受性が強く敏感・繊細」と捉える者の割合が他の群に比べて高い。

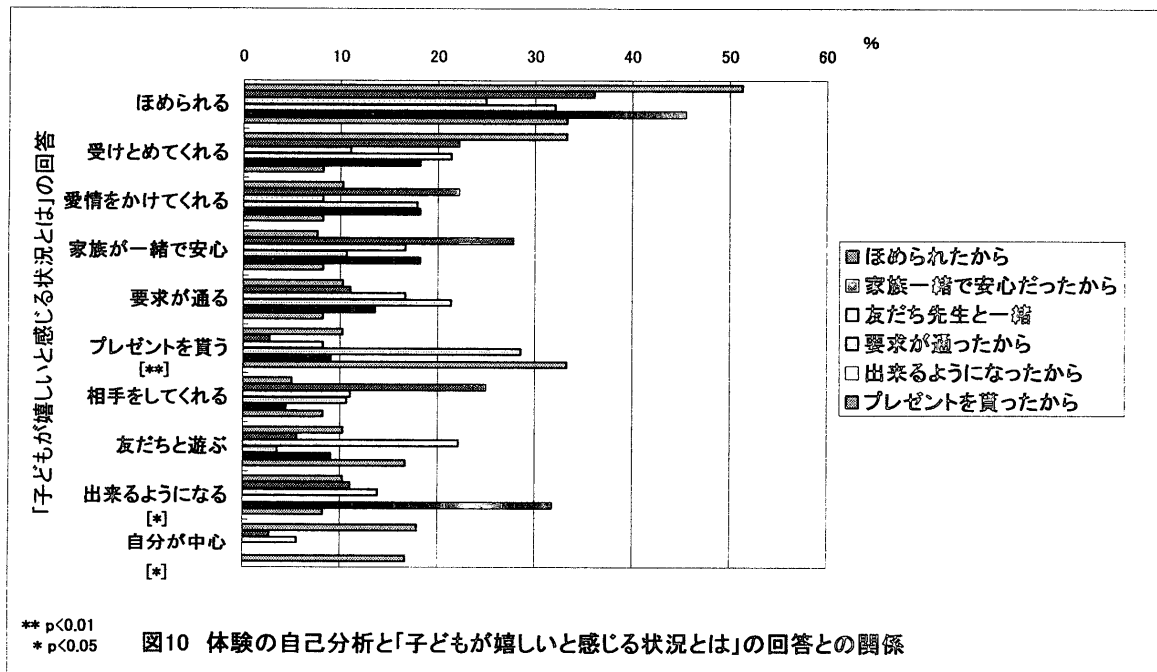
「家族一緒に安心だったから」と自己分析した者は、「子どもとは」の回答がさまざまに分散している。

「友だちや先生と一緒に楽しかったから」とした者は、「子どもとは、楽しく遊ぶ者だ」と捉える者が比較的多い。

「自転車などが出来るようになったから」とした者は「子どもとは元気で明るい」と捉える者の割合が高い。

#### (6) 体験の自己分析結果と「子どもが嬉しいと感じる状況とは」の関係

図 10 を見ると、自己の体験の自己分析がどのようなようであっても全体的には「子どもは、ほめられると嬉しい」と理解している者が高率である。中でも自己の体験の分析を「ほめられたから」とする者と「出来るようになったから」とする者は、より一層「子どもはほめられる状況が嬉しい」と理解している。



この項目は全体的に、相互の回答の間に関連が深い。例えば、「ほめられたから」と自己分析する者は「子どもとはほめられる状況が嬉しい」と理解し、「出来るようになったから」と自己分析する者は「出来るようになること」を嬉しい状況として挙げ、「プレゼントをもらったから」と自己分析する者は「子どもはプレゼントをもらおうと嬉しい」を挙げている。すなわち、自己の嬉しかった体験についての分析を子ども理解に向けて一般化していることが分かる。

そしてさらに詳しく見てみると、「ほめられたから」と自己分析する者は、「子どもは自分の気持ちを受けとめてくれることを嬉しいと感じる」と解釈している者の割合が高くなっていることがわかる。

「家族一緒に安心だったから」とする者は、「家族と一緒に安心できる人がいること」や「おとなが相手をしてくれること」「愛情をかけてくれること」を嬉しく感じると理解している。

「友だちや先生と一緒に楽しかったから」と自己分析する者は、「子どもとは友だちと遊ぶことが嬉しい」と捉えており、「要求が通ったから」と自己分析する者は、「プレゼントをもらうこと」と「要求が通ること」を嬉しいと感じるものだと捉えている。

#### (7) 体験の自己分析結果と「子どもと良い関係を形成するには」の関係

このような体験についての自己分析結果は、自分がおとなの側に立ったときに子どもと良い関係を築くためにはどうしたら良いかの回答と、どのように関連しているのだろうか。

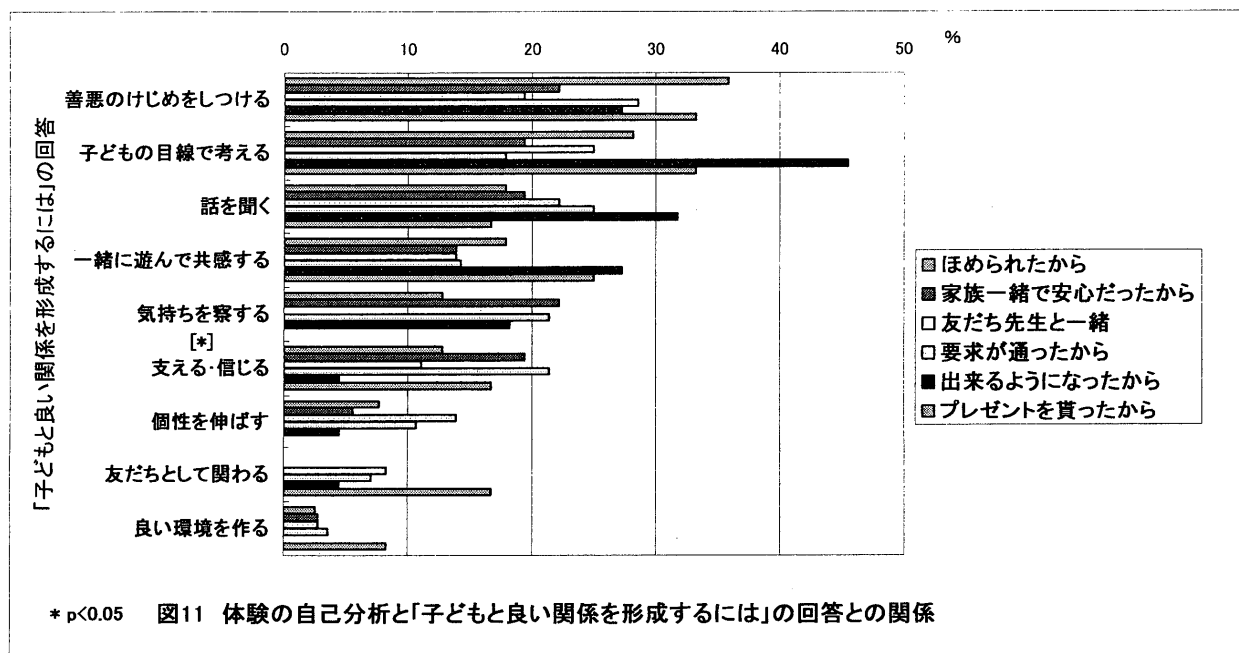


図 11 を見ると、自己分析で「ほめられたから」とする者は「善悪のけじめをしつける」の回答の割合が高く、「家族と一緒に安心だったから」と自己分析する者は「気持ちを察する」の回答が比較的多く、「友だちや先生と一緒に楽しかったから」とする者は「個性を伸ばす」の回答が他の群に比べて多いことが特徴的である。「要求が通ったから」とする者は「子どもを支える・信じる」の回答が比較的高率であり、「出来るようになったから」とする者は「子どもの目線で考える」がひととき高率であり、「話をよく聞く」「子どもと一緒に遊んで共感する」の割合も高くなっている。「プレゼントをもらったから」とする者は「友だちとして関わる」「良い環境を作る」が比較的高率である。

#### (8) 考察

以上の結果について、若干の考察をしてみたい。

楽しかった子ども時代のエピソードは「家族で旅行や外出」「家族が一緒」「お誕生会やクリスマス会」「幼稚園の遊び場面」などを挙げる者が多く、この結果は前報の調査結果と同様である。また、子ども理解の項目である「子どもが嬉しいと感じる状況とは」に対する回答は、「ほめられる」が最多で、「受けとめてくれる」「愛情をかけてくれる」「家族一緒に安心」などが多く、これらについても前報の結果とほぼ同様である。

本報では、自己の個人的な体験について自己分析することを通して「子ども」という存在に対する理解を、より身近で、確かなものにするを旨としたわけであるが、エピソードについての自己分析は、「ほめられたから」「家族一緒に安心だったから」「自分の要求が通ったから」「友だちや先生と一緒に楽しかったから」「優しくしてくれたから」「周囲が喜んでくれたから」などの、他者との関係性について述べている者が多かった。

したがって、自己の体験についての回想は、具体的状況の記述に流れがちであり、また、それに対する自己分析についても必ずしも十分なものとはいえないが、そこに表された記述は、実は、「子ども」とは、家族や友だち・先生など他者との関係性の中で“安心感”や“安堵感”を得るものである、ということに対する、彼女たちのいわば「気づき」が現れているものと思われる。

子ども期は誰でもがたどってきた発達段階であり、あの頃の「楽しかったこと」を思い起こし、な



ぜそれを嬉しいと感じたかを考えることは、子どもの視点から見たときに、周囲の人たちが子どもとの間に肯定的な関係性を構築することに向けて努力することが、子どもにとって嬉しいことであり、その重要性に気づくことを導くといえるようである。それはまた、子どもを育てる側に視点を移したときには、本調査の回答者の彼女たち自身の表現に拠れば、子どもを「ほめる」「受けとめる」「愛情をかける」などの、肯定的な関係性を構築することの重要性を育てる者の役割として自覚することを促すことになると思われる。

#### 引用文献

- 1) 臨時教育審議会：「教育改革に関する第二次答申」，昭和61年4月23日，p.48
- 2) 厚生労働省：「平成15年人口動態統計(確定値)の概況」平成16年9月8日
- 3) 文部省：「少子化と教育について」中央教育審議会報告，平成12年4月17日，p.5
- 4) 厚生省「平成10年度厚生白書—少子社会を考える—」，平成10年6月15日，p.84
- 5) 厚生労働省「児童相談所における児童虐待相談処理件数(速報値)」，平成16年度全国児童相談所長会議資料，2003.6.29，p.1
- 6) 前掲3)，p.19
- 7) 岡野雅子：青年期女子の子どもに対するイメージ彼女たちを取り巻く人間関係と親準備性獲得の課題との関連—，日本家庭科教育学会誌，第46巻第1号，2003，pp.3-13
- 8) 岡野雅子：子どもに対するイメージ女子学生と幼稚園児母親との比較と保育教育への示唆—，信州大学教育学部紀要第110号，2003，pp.57-67
- 9) 中西雪夫・牧野カツコ：高校生の「親になることへの準備状態」と保育教育(第2報)—「準備状態」の形成に影響を与える要因—，日本家庭科教育学会誌，第32巻第2号，1989，pp.55-59
- 10) 大路雅子・松村京子：雑誌掲載事例にみる中学・高校生の乳幼児体験学習の効果と問題点，日本家庭科教育学会誌，第41巻第1号，1998，pp.55-62
- 11) 岡野雅子：「子ども」理解の一方法としての自己の子ども期の回想—青年期の養護性獲得に向けて—，群馬女子短期大学紀要，26号，2000，pp.89-101

(2004年9月27日 受理)